論 文

鳥取県における森林・林業に関する意識調査（Ⅰ）

——森林資源について——

小笠原 隆三*
高 瀬 光 朗*
清 水 孝 洋*

A Study of Public Opinions Regarding Forests and Forestry in Tottori Prefecture (Ⅰ)

——Forest Resources——

Ryuzo OGASAWARA*
Mituro TAKASE*
Takahiro SHIMIZU*

Summary

The public opinions regarding forest resources in Tottori Prefecture are investigated. The results showed that many people requested that the present level should be maintained for forests in Tottori Prefecture. Many people were very aware of the difference between natural and artificially grown forests. Opinions on the ratio of natural compared with artificial forests varied ranging from "Present proportion should be maintained" (37 %) to "Artificial forests should be increased" (25 %), and "Natural forests should be increased" (24 %). There were many asserting that natural forests should be for the benefit of the public. Many see artificially grown forests as only for supplying lumber. Many people recognized the necessity of taking care of artificial forests. Only a few insisted that the owners of forests should assume responsibility for making and taking care of forests.

* 鳥取大学農学部 森林生産学講座
Department of Forestry Science, Faculty of Agriculture, Tottori University

I　緒　言

現在は，森林のもつ多くの効用を総合的かつ高度に利用していくことが，社会の要請とされている。こうした効用の中でも，公益的効用に対する要請は，近年益々強まってきている。

しかるに，山村では労働力不足や労賃の高騰などが原因して林業の停滞がもたらされている。

その結果，森林のもつ経済的効用のみならず，公益的効用の低下をもたらすことが危惧されるようになった。

森林資源を経済的効用と公益的効用の面で有効に利用していくためには，単に森林所有者のみの問題として解決を求めるのでなく，国民全体の問題として考えていかなければならない時代になってきている。

本報では，鳥取県において県民が森林，林業をどのようにみているか，とくに森林資源を中心にして調査し，今後の適正な行政上の対策を考えていく場合の参考に供しようとするものである。

II　調査地および調査方法

鳥取県は，山陰道の中央部に位置し，北は日本海に面し，東，西，南の三方は兵庫県，島根県，岡山県，広島県に隣接している。

鳥取県の総面積は3493㎢で，そのうち森林面積は2590万 ha（74%）で，全国平均より高い値を示している。また，人口は約63万人で4市31町4村から成っている。

調査地は，都市部では鳥取市，米子市，倉吉市，山村部では若桜町，智頭町，三朝町，関金町，日野町，日南町とした。

都市部，山村部に対して600人を無作為に選定し，郵送によるアンケート調査と一部聞きとり調査を行った。

その結果，383人（63.8%）の回答をうることができた。

集計結果の合計が100%にならないものもみられるが，これは小数点以下2桁で四捨五入したことによるものである。

III　結果および考察

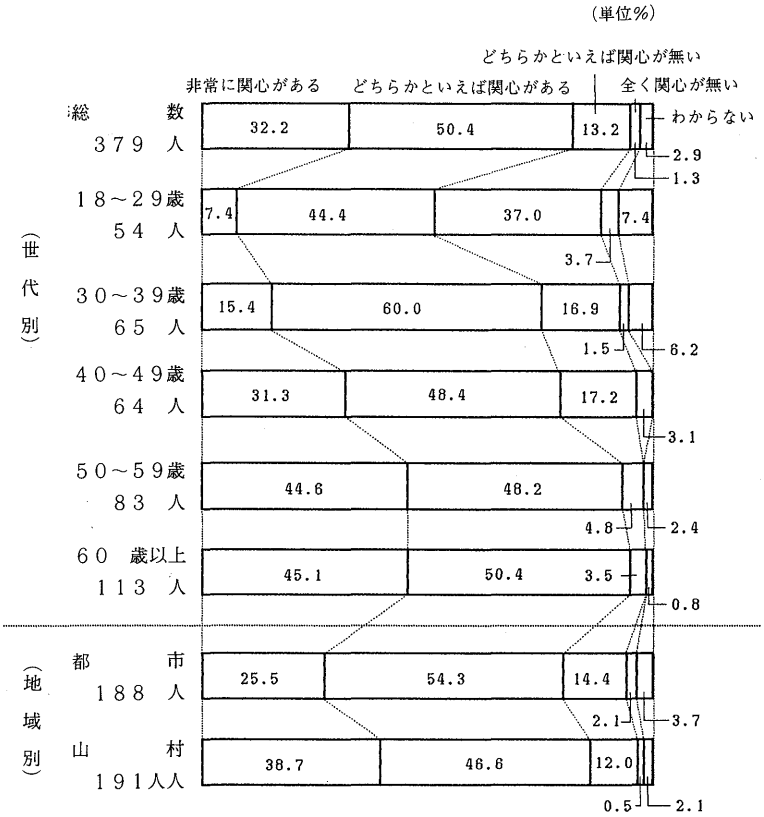
自然の中でも森林は主要な位置を占めているが，その森林に対して，鳥取県民がどの程度の関心をもっているかをみた結果は図1のようである。全体でみると，「非常に関心がある」が33.2%，「どちらかというと関心がある」が50.4%，「どちらかというと関心がない」が13.2%，「全く関心がない」が1.3%である。大なり小なり森林に関心をもっている人は83.6%に達し，関心のない人を大きく上回っている。

これを年代別にみると，年齢が高まっていくにつれ関心のある人，とくに「非常に関心がある」という人が増加していく傾向がある。

地域別でみると，著しい差はみられないが，山村の方が都市より関心の度合が大きいようだ。

次に，この一年ぐらいの間に，仕事以外のことで山や森に行ったことがあるかについてきいてみ

図１　森林についてどの程度関心がありますか。



た結果は，図２のようである。

全体でみると，「行ったことがある」が80.6％で予想以上に多くの人が山や森に行っていることがわかった。

「行ったことがある」については，年代や地域による差は少ない。

総理府の調査[1]によると，全国平均で50.1％の人が山や森に行ったことがあるとしており，それにくらべると鳥取県民は山や森林に行った人がはるかに多いことになる。

次に，山や森に行ったことのある人に，その目的についてきいた結果は，図３のようである。

全体でみると，「山菜採りなど」が23.5％と最も多く，次いで「すぐれた景観や風景を楽しむため」の20.8％，「自然の中でのんびりするため」の16.0％，「ドライブ」の11.8％などの順である。

年代別では，年齢が高くなると「山菜採りなど」が多くなり，若い年代で「ドライブ」が多くなる傾向がある。

地域別では，山村で「山菜採りなど」が特に多いが，その他の項目では「自然を観察する」と「その他」以外はすべて都市の方がわずかに大きな値となっており，中でも「ドライブ」が最も大きい。

近年，森林の効用の一つとして森林浴が話題となってきたが，本調査では，森林浴を目的とする人は全体で7.1％と少なかった。

図2　この一年ぐらいの間に山や森などへ，仕事以外で行ったことがありますか。

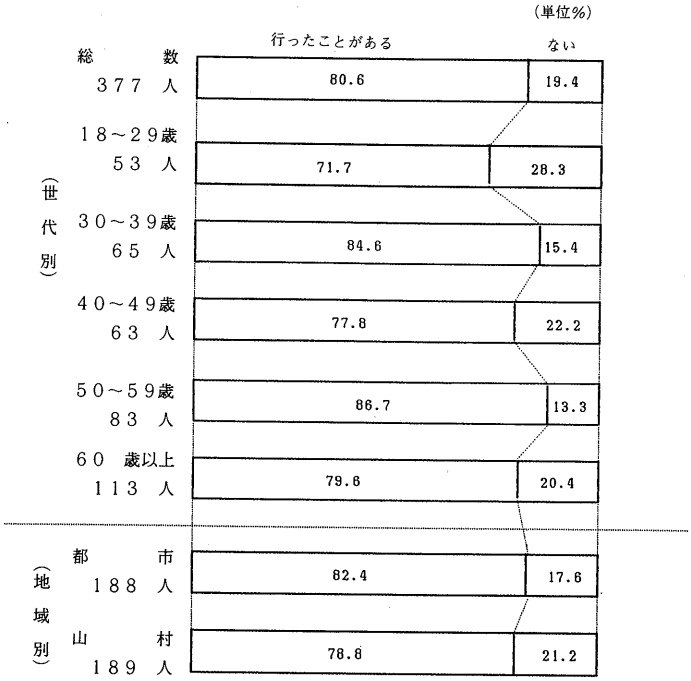
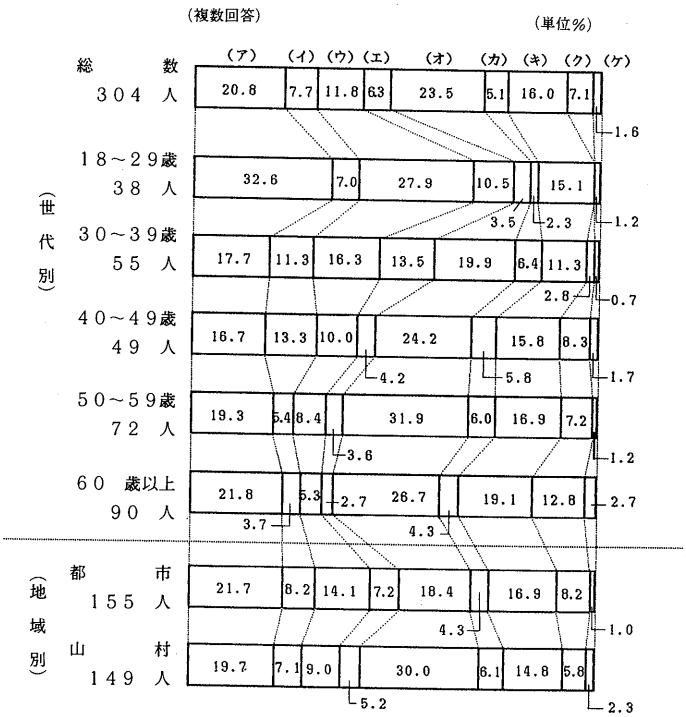


図3　山や森などへ行った目的は何ですか。



(ア)すぐれた景観や風景を楽しむ
(イ)ピクニックやキャンプなど
(ウ)ドライブ
(エ)登山やスキーなどのスポーツ
(オ)山菜採りなど
(カ)自然を観察する
(キ)自然の中でのんびりする
(ク)森林浴
(ケ)その他

しかし，森林の中を散歩するのが好きかについての問いに対しては83.0％の人が「好き」と答えている。（図４）尚，年代別では高齢の方が，地域別では山村の方が「好き」と答えている人が多い。

富村等[2)]によると，森林の中の散歩が「好き」と答えている人は旭川で77％，鶴岡で77％，櫛引で66％，伊那で80％，宮崎で80％，東京で62％となっており，これらのいづれとくらべても鳥取県の方が高い値を示している。

鳥取県民の多くは，森林の中を散歩するのが好きであることから，森林浴に関する普及や遊歩道，ベンチなどの設備をととのえることにより，より森林を利用する人が多くなることが期待できるであろう。

日本人は，木や森に対して宗教的感情をもっていることは古くから知られている。

大きな古い木を見たとき，何か神々しい気持ちをいだくかについて調べた結果は図５のようである。全体でみると，「いだくことがある」が83.2％もあり，「いだかない」の16.8％を大きく上回っている。

世代別では，年齢が高くなるにつれ「いだくことがある」が多くなり，60才以上では実に97.3％に達する。

地域別では，差はみとめられない。

次に，深い森に入ったとき，何か神々しい気持ちをいだくか，について調べた結果は図６のようである。

図４　森林の中を散歩するのが好きですか。　（単位％）

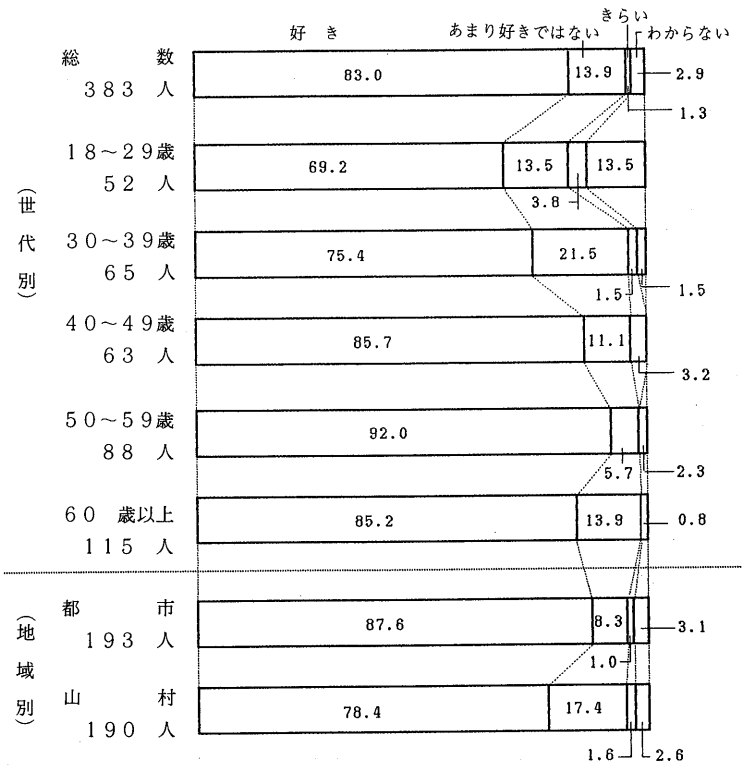


図5　大きな古い木を見たとき，何か神々しい気持ちをいだきますか。

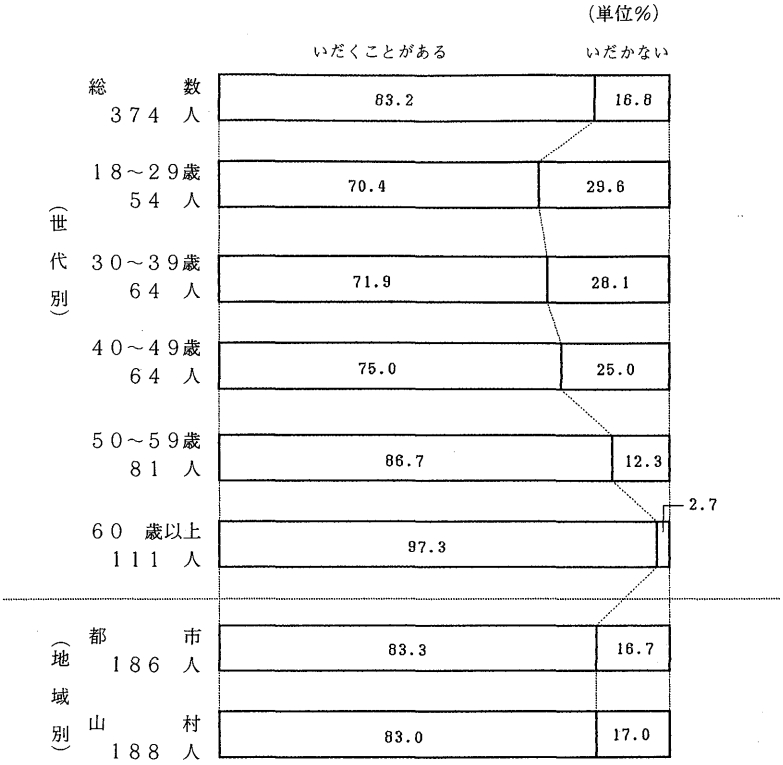
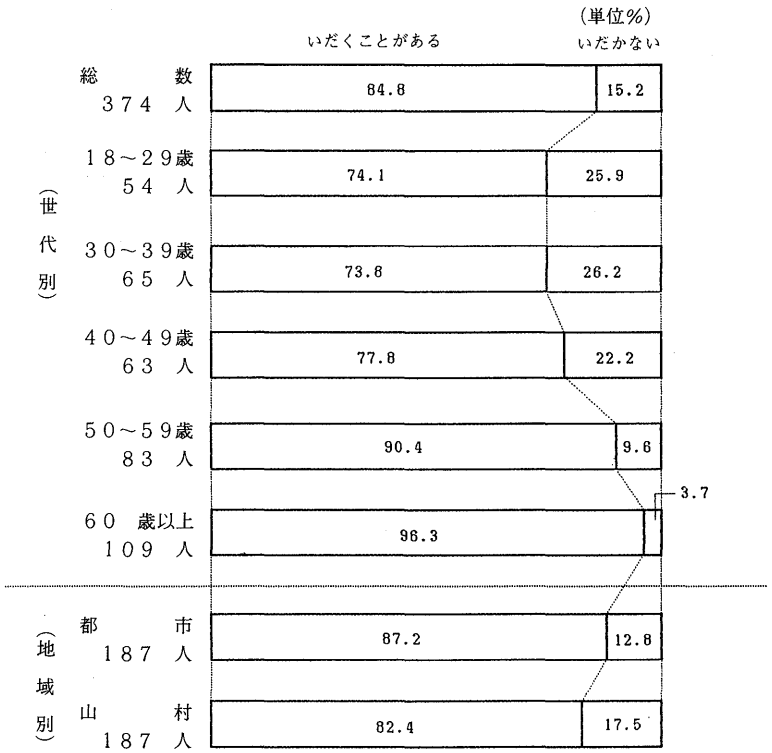


図6　深い森に入ったとき，何か神秘的な気持ちをいだきますか。



全体でみると，「いだくことがある」が84.8%，「いだかない」が15.2%で，大きい古い木に対すると同様に神々しい気持ちをいだくことが明らかになった。

年代別では，年代が高くなるほど「いだくことがある」が多くなっている。

富村等[2)]による旭川，鶴岡，櫛引，伊那，宮崎等にくらべて，ごくわずかに低いが東京よりはかなり高い値を示している。

東京を除く他の地域（旭川，鶴岡等）と同様に鳥取県では都市，山村とも古い木や深い森林に対して宗教的感情をもっていることが明らかになった。

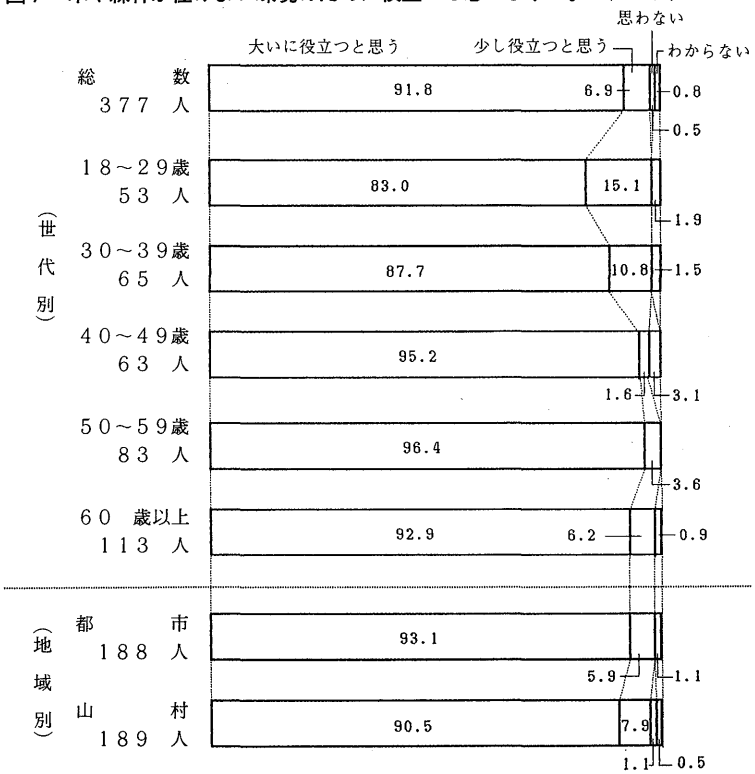
次に，木や森林が住みよい環境のために役立っていると思うかについて調べた結果は図７のようである。

全体では，「大いに役立つ」が91.8%と高く，「少し役立つ」は6.9%である。両者を合わせると98.7%となりほとんどの人が，森林は住みよい環境のために役立っていると考えていることがわかった。

年代別，地域別でみると，その差はあまりみられないが，若い人より，高齢の人が，山村より都市の方が，環境として役立っていると思う人がごくわずかながら多いようだ。しかし，老若をとわず，山村や都市の区別なく，森林は環境としても役立っていると考えている人が多いとみることができよう。

近年，木材の代替材として金属，プラスチックなどによる家具，器具が多くなってきた。しかし，

図７　木や森林が住みよい環境のために役立つと思いますか。（単位%）



最近は再び木製品を見直しする声がではじめた。こうした中で，木材を用いた住宅，家具，器具などについて，今後どのようにしたいと考えているかについて調べた結果は図8のようである。

全体では「増やしたい」が72.2%で，「減らしたい」の1.3%，「現在のままでよい」の22.8%を大きく上回っている。

このことについては，年代や地域による差はあまりみとめられない。

これらのことから，鳥取県の場合も木材による住宅や器具等に対して見直しがおこっているとみることができよう。

以上のように，鳥取県の場合，森林のもつ環境としての効用等に対する評価をしているとともに，木材に対する評価もみとめられる。

では，次に今後，森林に対してどのような役割を期待しているかを調べてみると図9のようである。

全体でみると，経済的効用である木材生産は，20.5%に対して，公益的効用である水資源確保31.6%，災害防止23.8%，大気の浄化，騒音の緩和12.2%，レクリエーション4.7%，動植物の保護4.2%等となっている。

経済的効用と公益的効用をくらべると，経済的効用が20.5%に対して，公益的効用は78.1%と圧倒的に高い。

図8　木材を用いた住宅，家具，器具などについて，今後どの様にしたいと考えていますか。

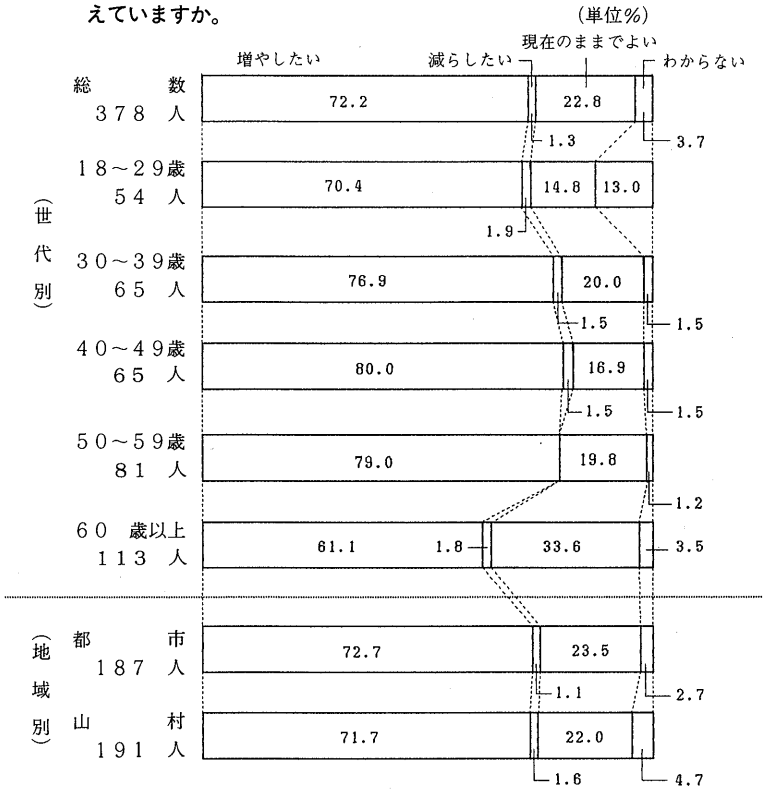
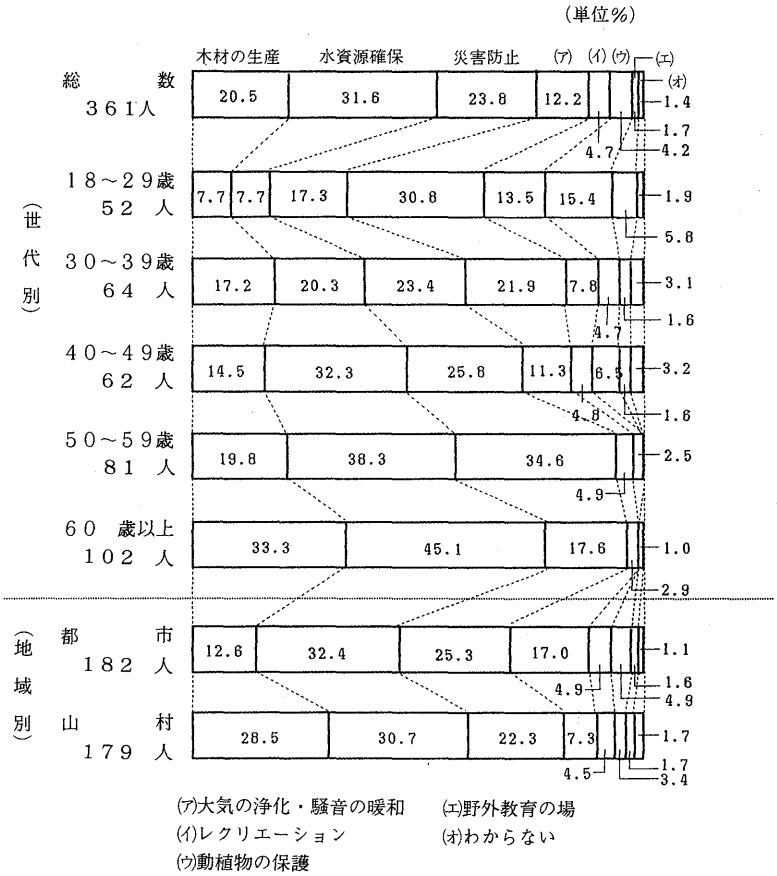


図9　森林について今後どのような役割を期待しますか。



年代別にみると，年代が高まるほど木材生産，すなわち経済的効用に対する期待が高まっていき，それに対して公益的効用が低下していく傾向がみられる。

しかし，公益的効用の中では，年代が高くなるにつれ水資源確保や災害防止に対する期待が大きくなるに対し，若い方は，大気の浄化，騒音の緩和やレクリエーション等に対する期待が大きくなる傾向がみられる。

地域別では，山村部で木材生産に対する期待が大きく，都市部では，公益的効用，中でもレクリエーションに対する効用が山村部より大きい傾向がみられる。

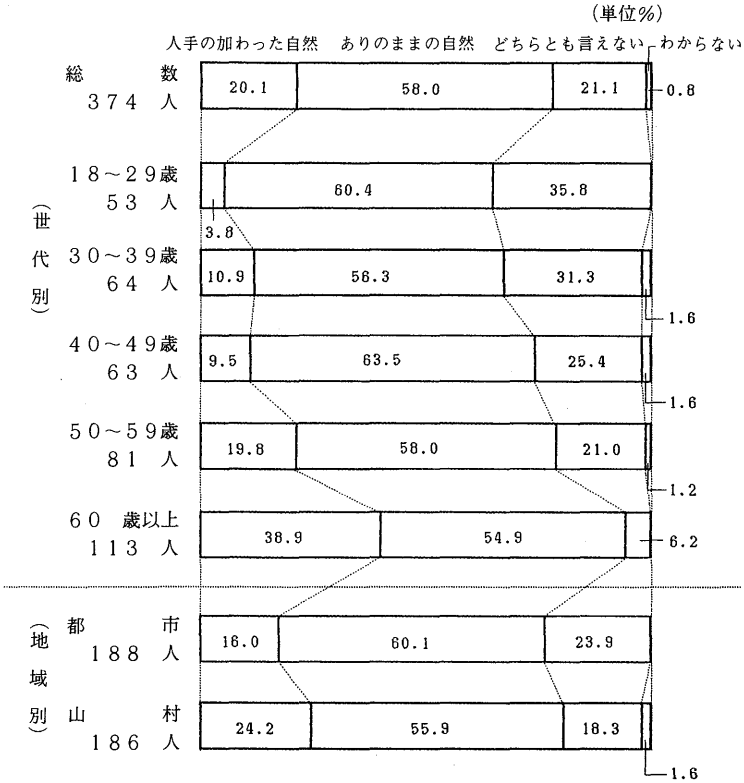
鳥取県の場合，期待する森林の役割として公益的効用の方が経済的効用よりはるかに大きく，中でも水資源確保，災害防止等による期待が大きい。

次に，そのような役割を期待する県民の場合，人手の加わった自然と人手の加わらないありのままの自然とどちらが好きかをきくと図10のようである。

全体では，「人手の加わった自然」を好む人は20.1%，「ありのままの自然」を好む人が58.0%，「どちらとも言えない」が21.1%である。

年代別では，年代の高い方で人手の加わった自然を好む人が多くなり，若い方ではどちらとも言

図10　人手の加わった自然とありのままの自然のうち，どちらが好きですか。



えないが多くなっていく。

地域別では，山村で人手の加わった自然を好む人が少し多く，都市部ではありのままの自然，どちらとも言えないが少し多い。

森林の効用のうち木材生産を期待する人が20.5%であるが，人手の加わった自然の20.1%とほぼ同じ値を示している。これは人手の加わった自然，すなわち，人工林をイメージしたのかもしれない。人手の加わった自然ともありのままの自然とも，どちらとも言えないが21.1%あることが興味を引く。これが森林の場合，人工林でも公益的効用が期待できるとすることにつながることであれば大変喜ばしいことである。

次に，自然と人間の関係をどのように考えているかについてみると図11のようである。

全体でみると，「自然と人間とは共存する」が72.8%と圧倒的に多く，次いで「自然に従う」が15.6%である。「自然を支配する」が9.1%と少なかった。

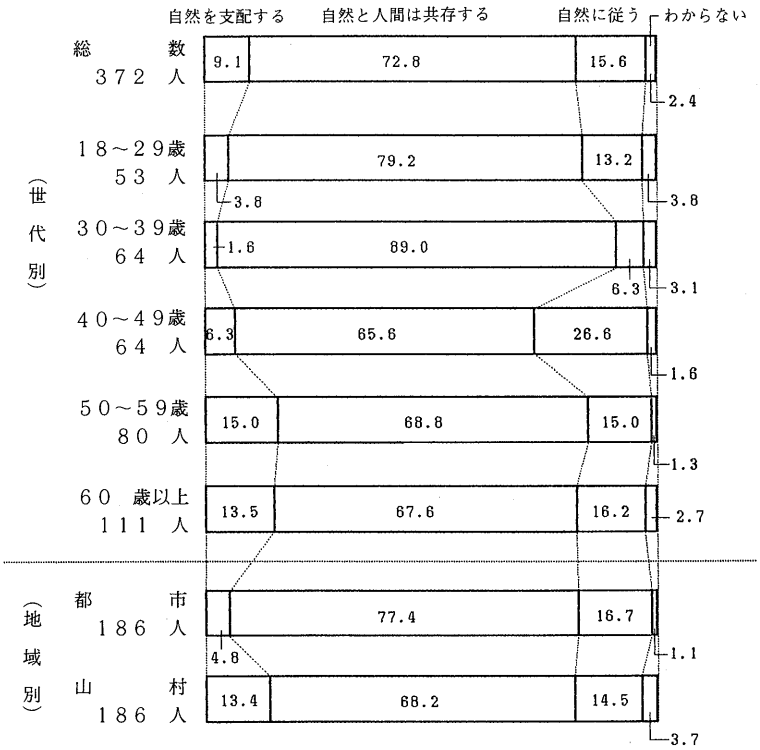
年代別では，年代が高くなると「自然を支配する」が多くなり，地域別では山村の方が「自然を支配する」が多くなる。

「自然と人間は共存する」が圧倒的に多いが，日本人は古来，自然と調和を保ちながら文化を形成してきたとされていることから当然の数値かもしれない。

ヨーロッパ人は，自然を征服の対象とみる考えがつよいとされているが，日本も明治以降ヨーロ

図11　自然と人間との関係をどの様に考えていますか。

（単位%）



ッパ文化とくに科学文明の影響をうけ，近年はとくに自然の破壊が著しくなったとされている。

しかし，本調査では，「自然を支配する」が9.1%と予想外に少なく，とくに若い年代で少なかったことは興味を引いた。

人間が自然に服従すべきものとの考え方が中南米の文化の中にみられるとされている。

本調査で，「自然に従う」が15.6%と予想外に高い値を示した。しかし，これは前記の自然に服従すべきものとする考え方とみるよりも，自然と対決せず調和を望むとする考え方の可能性がつよい。

都市より山村で，「自然を支配する」が多いのは，おそらく，山村では林業を生計の全部又は，一部としている人が多く，その主体が人工林であることも関係していよう。

Ⅳ　要　　旨

(1)　森林について多くの人（82.6%）が何らかの関心を持っていた。

(2)　この1年間に，多くの人（80.6%）が山や森に行っていた。

(3)　山や森などへ行った目的は，山菜採りなど（23.5%），すぐれた景観や風景を楽しむ（20.8%），自然の中でのんびりする（16.0%），ドライブ（11.8%）などであった。

(4)　森林の中の散歩を，多くの人（83.0%）が好んでいた。

(5)　大きな古い木に対して，多くの人（83.2%）が神々しい気持ちをいだくことがあったとしてい

る。

(6) 深い森に対して，多くの人（84.8%）が神秘的な気持ちをいだくことがあったとしている。

(7) 木や森林は住みよい環境のために役立つと，ほとんどの人（98.7%）が考えていた。

(8) 今後，木材製品については多くの人（72.2%）が増やしたいと考えていた。

(9) 森林に今後期待するものについて，経済的機能をあげた人（20.5%）よりも，公益的機能をあげた人（78.1%）が多かった。

(10) 人手の加わった自然を好む人（20.1%）より，ありのままの自然を好む人（58.0%）が多かった。

(11) 自然と人間との関係については，多くの人（72.8%）が自然との調和を望んでいた。

文　　献

1）総理府広報室編：みどりと木　月刊世論調査　3　p. 2～30（1987）

2）富村周平・菅原聡：自然の国際比較に関する研究（IV）
——住民意識の中の自然——日林論　93　p.65～66　（1982）